

大阪

あんなとこ
こんなとこ

『道頓堀』

大阪の観光名所といえば、やはり道頓堀。大阪に来たことがない方もグリコの看板、かに道楽など、水面に映る極彩色のネオンが瞬く道頓堀の景色をご存じなのではないでしょうか。今回は、道頓堀について調べてみました。

道頓堀今昔

天正10年（1582）頃、道頓堀の開削者である安井道頓（成安道頓）は、豊臣秀吉より城南の地を与えられました。それは、大坂城の外堀の掘削や猫間川河岸整備に対する功績に対しての賞と言われています。城南の開発には河川の掘削が必要と考えた道頓は、慶長17年（1612）私財を投じ、城南地域中心部の水路掘削に着手しました。

しかし、道頓は、元和元年（1615）大坂夏の陣で豊臣方に加勢し入城、大坂城内で掘削半ばにして討ち死にしています。その後、道頓の意志を継いだ従弟の安井道卜や平野郷の平野藤次（安藤藤次）などが摂津大坂藩主・松平忠明の許可を受け、同年11月に水路を完成させました。当初この水路は、新堀または南堀川、新川と呼ばれていましたが、松平忠明が道頓の功績を評価し、道頓堀と名付けたと言われています。さらに、道卜は、道頓堀川の両岸に市街地を建設。南船場にあった芝居小屋と遊所を道頓堀に移転させることを願い出しました。寛永3年（1626）に許可された頃より、小屋が建ち並び、多くの人が集まるようになりました。最盛期の寛文2年（1662）には、歌舞伎、義太夫、見世物などの小屋が並び、浪速座、中座、角座、朝日座、弁天座の五座の櫓が立ち、芝居茶屋も軒を連ね上方芸能の中心地として賑わいました。

現在の道頓堀は、五座や芝居小屋も姿を消し、おびただしい数の飲食店や多種多様な商品を扱う商店がひしめき、松竹座が建つのみです。当時を伺い知る伝統行事の「船乗り込み」は、役者が船で川を巡り、道頓堀から劇場に入るといふものです。昭和54年（1979）に55年ぶりに復活して以来、毎年7月の大歌舞伎公演前に行われている夏の恒例行事です。平成16年（2004）戎橋から太左衛門橋の両岸に遊歩道「とんぼりウォーク」が整備され、平成19年（2007）には、道頓堀に架かる戎橋が82年ぶりに架け替えられました。また、遊覧船が運行するなど変化し続けています。



橋の上では看板を背に写真を撮る姿をよく見かけます

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞